

解答範囲は、解答番号 から までです。

(二) 左の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、原文を改変した箇所があります。

【引用部分は削除しています】

【引用部分は削除しています】

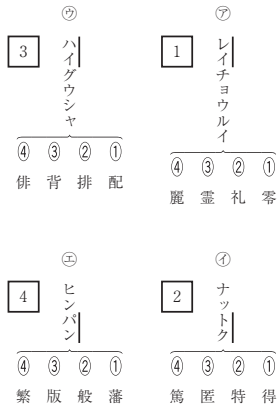
【引用部分は削除しています】

(高橋恵子・柴田玲子・山川賀世子「育つ幼児たち―子と親の関係を見直す」による)

(注) ○アントヌツチ・アントヌツチ。アメリカの心理学者。ミシガン大学教授。一九四八。

問一 傍線部⑦～⑨にあたる漢字を、次の各群のうちから一つずつ選びなさい。

解答番号 1 4



問二 空欄 A と B を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

解答番号 5

- ① A つまり B したがって
- ② A さらに B ところが
- ③ A いわゆる B しかし
- ④ A または B そのかわり

問三 傍線部①「生物学的性質」を使っている事例として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 6

- ① 食べ物が豊富な所で暮らし、互いにつながるための遺伝子を受け継ぐこと。
- ② どんな人混みの中でも、親が自分の子どもの声を判別し、すぐ見つけられること。
- ③ おむつが濡れて気持ちが悪い時に、まわりの人にぐずったり泣いたりすること。
- ④ 生後すぐに親を見分け、生理的な要求がある時に、言葉を発して気づいてもらおうとすること。

問四 傍線部②「これらの問題」の事例として、明らかに合致しないものを一つ選びなさい。

解答番号 7

- ① 家事や育児を母親が中心でやっているのに、子どもが父親にばかりなっていること。
- ② 子どもが先生のことを嫌いだと言って、幼稚園に行かないこと。
- ③ 親が好ましくないと感じているゲームやテレビ番組に子どもが夢中になっていること。
- ④ きょうだいの仲がよすぎて、家庭の外でそれぞれの友達を作ることができないこと。

問五 傍線部③「人間関係についての「枠組み」」が示すものとして、明らかに合致しないものを一つを選びなさい。

解答番号 8

- ① それぞれの子どもが示す、母親から離れないなどの対人的行動。
- ② それぞれの子どもがつくりあげた、複数の重要な人々との関係。
- ③ それぞれの子どもが持っている人々とのつながりの内容全体。
- ④ それぞれの子どもが頭の中で考える周囲の人々の位置づけ。

問六 傍線部④「図一」の使い方について、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 9

- ① 円の中央には自分にとって最も大切な人の名前を書き、外の円にいくにしたがって大切な度合いが低くなる人を書き込んでいく。
- ② 最初に第一の円に入る大切な人を一人あげて理由を書き、次に大切な人を第二の円にあげて理由を書く、ということを繰り返す。
- ③ 中心に近い円から順に、親しさの程度に応じて、自分にとって重要な人を書き込んでいくが、すべての円を埋める必要はない。
- ④ 自分にとって重要な順に、第一の円から第三の円に書き込んでいくが、その次に重要な人がある場合には、第四の円を描いてその中に書き込んでいく。

問七 傍線部⑤「日米でよく似た結果が得られました」とありますが、その結果として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 10

- ① 第三の円に誰も入れない人は精神的に不安定な人が多かった。
- ② 男性は男性の友人を、女性は女性の友人をより内側の円にあげる傾向があった。
- ③ どの円にもたくさんの人をあげた人は精神的健康度が高かった。
- ④ それぞれの円には、実際に会ったことがない人を入れる人もいた。

問八 傍線部⑥「比較的に長く関係が続くような相手を選ぶ」とありますが、その理由としてもっとも適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 11

- ① 自分にとって重要な他者が度々変わるということは、その人が真の意味で重要ではなかったということを意味するから。
- ② 自分にとって重要な他者とは、結局、多くは家族や友人というような永続的に関係が変わらない人のことだから。
- ③ 人とながらいたいという遺伝子が我々に受け継がれており、関係が変わらない人を選ぶようになっていいるから。
- ④ 自分にとって重要な他者と恒常的につながることで、安定した気持ちを維持しやすいから。

問九 この文章の内容に明らかに合致しないものを一つ選びなさい。

解答番号 12

- ① ホモ・サピエンスは草原に住み始めたために、互いにつながりやすくなる知恵を進化させたと考えられる。
- ② 米国の心理学者アントヌツチらの調査で、母親をあげなかった人は精神的健康の程度が低かった。
- ③ 生後すぐの乳児は、応答してくれる人ならば親以外の人にも助けを求め、つながろうとする。
- ④ どれだけ長い時間が経過しても、つながりたいと思う相手が変わらないこともある。

(二) 左の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【引用部分は削除しています】

【引用部分は削除しています】

【引用部分は削除しています】

(阿辻哲次「部首のはなし」による)

(注) ○洛北Ⅱここでは京都市の市街地北部から北山あたりまでを指す。

問一 傍線部①「生活空間としてそんなに広いというイメージはなかった」とありますが、その理由として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 13

- ① 筆者の蔵書は多数の本箱にさえ収まらず、生活空間を侵食していたから。
- ② 老朽化した八畳二間からなる離れを借りることしかできなかったから。
- ③ 筆者が所属していた東洋学系統の講座は大量の書物が必要とする者が多かったから。
- ④ スチール製の本箱を十八台しか並べられなかったから。

問二 傍線部②「日本十進分類法」について、この文章から読みとれる内容として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 14

- ① 日本であれば、どここの図書館の蔵書でもかならずこの分類法のラベルが貼られている。
- ② 二桁めの数字は下位区分であり、その本が著された地域を示している。
- ③ この分類法では数字とローマ字を組み合わせて、分類を示している。
- ④ 何桁かの数字の最初の桁は、最も大きな分類を示している。

問三 傍線部③「索引」について、この文章から読みとれる内容として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 15

- ① 漢和辞典より国語辞典や英和辞典の索引が使いやすいのは、配列が二種類しかないからである。
- ② 一般的に、漢和辞典には五十音順で検索できる索引も採用されている。
- ③ 部首索引は、漢字を検索する際に最も合理的で完璧な方法である。
- ④ 多くの漢和辞典は総画索引が最も使いやすい。

問四 傍線部④「皮肉なこと」とありますが、何が「皮肉なこと」なのでしょうか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 16

- ① 本来、漢字の発音順は日本語の五十音順とは異なるにもかかわらず、日本人にとって音訓索引が最も使いやすい索引であること。
- ② 最も使いやすいのは音訓索引であるにもかかわらず、ほとんどの漢和辞典は、発音順ではなく部首ごとに分類して配列する方法を採用していること。
- ③ 漢和辞典を引く際、音訓索引が使えないことがしばしばあるにもかかわらず、総画索引や部首索引が一筋縄ではいかない複雑な要素を持っていること。
- ④ 音訓索引は漢字の音が調がわかっているれば最も使いやすい索引であるにもかかわらず、多くの場合、そもそも漢字の音や調を調べるのが漢和辞典を引く目的であること。

問五 傍線部⑤「画数」について、この文章から読みとれる内容として明らかにふさわしくないものを一つ選びなさい。

解答番号 17

- ① 画数索引の欠点は、画数が正確にわからない場合が存在することにある。
- ② 同じ構成要素を持つ字であれば、常用漢字であるかどうかにかかわらず、その構成要素の画数が異なることはない。
- ③ 中国においては、読者が画数を正確に数えられない可能性を想定した辞典が出版されている。
- ④ 当用漢字や常用漢字が制定されたことによって、同じ形であっても画数が異なる事例が生じた。

問六 空欄 a 〃 d のいずれかに次の括弧内の一文が入ります。挿入すべき位置として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 18

「はつきりいえば、いまの日本では画数を計算する統一的な基準がきちんと確定されていないといっても過言でない状態なのである。」

- ① a
- ② b
- ③ c
- ④ d

一般選抜入試(後期日程) 国語(3月10日)

問七 傍線部⑥「漢字を部首ごとに分類して配列する方式」とありますが、この方式の欠点として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 19

- ① 部首ごとに配列されていても、配列される部の順序は画数によってしか推測できないこと。
② 部首ごとに配列されていても、配列される部の順序は音調によってしか推測できないこと。
③ 調べようとする漢字の部首がわからないと、その文字の配列箇所が推測できないこと。
④ 調べようとする漢字の部首の画数がわからないと、その文字の配列箇所が推測できないこと。

問八 この文章の内容に明らかに合致しないものを一つ選びなさい。

解答番号 20

- ① 筆者にとって蔵書が増えてゆくことは喜びを伴っていたが、大量の蔵書の管理には神経を使っていた。
② 当用漢字や常用漢字の制定によって画数の変更などが生じたため、不合理も引き起こされた。
③ 部首索引の使い方は学校教育でも習うが、それだけでは部首索引を使いこなすことは難しい。
④ 漢和辞典における部首の配列は、時代や出版社によって異なることがしばしばある。

〔三〕 左の文章は、『海道記』の一節です。出家してひっそりと質素に暮らすある人物が、人生を振り返り、京から鎌倉へ旅に出ます。これを読んで、後の問いに答えなさい。

白川の渡、中山の麓に、閑素幽栖の佐士あり。性器に **A** なければ、能を拾ひ芸を容るるに足るべからず。身運は本より薄ければ、報を恥ぢ、命を顧みて、恨を重ぬるに処なく、徒らに、食泉の蝦蟇と成りて、身を頼に寄せて、力なき音をのみ啼き、空しく、窮谷の埋木として、意の樹、花たえたり。惜しからぬ命の、さすがに惜しければ、投身の淵は、胸の底に浅し。存しかひなき心は、愁ひに存したれば、断腸の棘は、愁の中にしける。

春は歳を折りて、臨める飢を支ふ。伯夷が賢にあざれば、人もとがめず。秋は果を拾ひて、貧しき病を癒す。華氏が薬も、いまだ飢あたるをば治せず。九夏三伏の汗は、拭ひてくるしからず。手の中に扇あれば、涼を招くにいとやすし。女冬素雪の嵐は、凌ぐにあたはず。身の上に衣なければ、寒を防ぐにすべなし。窓の蛩も集めざれば、目は暗きが如し。何を見てか志を養はん。樽の酒も酌む事を得ざれば、心は常に醒めたり。如何にか憂を忘れんや。

然る間、逝く水早く流れて、生涯は崩れんとす。留めんとすれども留まらず、五旬齡の流車、坂にくたる。朝に馳せ、暮に馳す。日月廻の駿駒、隙を過ぐ。鏡の影に對ひ居て、知らぬ翁に恥ぢ、鐙子を取りて、白糸にあはれむ。之に依りて、頭上には頻りに駭かす、老を告ぐる鶴。鬚の辺には早く落ちぬ、霜を厭ふ華。鶴に驚き霜を厭ふ志、忽ちに催して、僧を学び仏に帰する念ひ、漸くにおこす。

名利は身に寄せつ。稠林に花散りなば、覺樹の果は熟するを期すべし。薛蘿は肩に結べり。法衣色染みなば、衣裏の珠は悟る事を得つべし。旦暮の露の身は、山のかげ、草拵く所あれども、朝の霞は望み絶えて、天を仰ぐに空し。世を厭ふ道は、貧しき道より出でたれども、仏を念する思は、遺思に怠。四聖の無為を契りしも、一聖猶頭陀の路にとどまりき。単己が有為を厭ふ、貧しき己、いよいよ、坐禅の窓にこそがし。

① そもそも、相模国・鎌倉郡は、下界の鹿洗苑、天朝の紫羅洲なり。武將の林をなす、万榮の花万にひらけ、勇士の道に昌えたり、百歩の柳百たび中る。弓は暁の月に似たり、一張そばたて胸を照らし、劍は秋の霜の如し、三尺たれて腰すずし。勝鬨の一陣には、爪を櫛にして寇を此に伏す。猛豪の三兵は、手にしたがへて互ひに雄称す。干戈、威厳しくして、梟鳥取てかけらず。誅戮、罪きびしくして、虎狼水く絶えたり。

この故に、「一朝の春の梢は、東風にあふがれて恵をまし、四海の潮の音は、東日に照らされて波を澄ませり。貴賤臣妾の往還する多くの駅の道、隣をしめ、朝儀國務の理乱は、万緒の機、かたがたに織りなす。羊質、耳の外に聞きを成して、多蔵をわたり。舌の端に言ふをして、幾日をか送るや。心船いつはりの為に漕ぐ、いまだ海道万里の波に極さず。意馬あらましに馳す、関山千程の雲に纏うたず。今すなはち芳縁に乘じて、俄に独身の遠行を企つ。

(『海道記』による)

(注)

- 白川の渡、中山 現在の京都市左京区、白川沿いの丘陵地。 ○性器 生まれつきの性質や才能。
○食泉の蝦蟇 〔食泉〕は現在の中国広東省にあった泉の名。飲むと食欲の心を起こすとされ、ここに住む蝦蟇(ヒキガエル)は醜く欲深いものの比喩。 ○窮谷 深い谷。 ○伯夷 古代中国、殷代末期の人物。周の武王に諫言して容れられず、周の穀物を食べたことを恥として藜を食したとされる。 ○華氏 後漢の伝説的名医・華佗を指す。
○九夏三伏 夏の暑い盛り。 ○五旬齡 五十歳。 ○流車 流れるように速く走る車。あとの「駿駒」(足の速い馬)も同じく、歳月が早く過ぎることの比喩。 ○鐙子 毛を抜く道具。 ○名利 名声や利益。 ○稠林 木が茂るように盛んに煩惱が生じること。 ○覺樹 悟りを開くこと。 ○薛蘿 粗末な服。 ○衣裏の珠 着物の裏に隠された宝玉。ここでは人が本実持つ仏になれる性質のこと。 ○旦暮 朝と晩。ここでは人生の終わりが迫っていること。 ○遺思に怠る 俗世に未練があつて怠けがちなこと。 ○四聖 悟りを得た者たちの総称。
○一聖 ここでは四聖に至らない一介の修行者を指す。 ○頭陀 衣食住への執着を払いのける修行。 ○単己 一人。

孤独な身。 ○鹿洗苑 仏教の守護神である帝釈天が住む喜見城の城外にある庭。敵と戦おうとする帝釈天がここに入ると必要な武器が自然に現れるとされる。 ○天朝 日本。 ○紫羅洲 唐の徳宗が塩州の地に外敵を防ぐための堅固な城壁を築いたこと。 ○百歩の柳百たび中る 百歩離れた所から柳の葉を百発百中で射当てる。「史記」の養由基の故事による。 ○寇 敵。 ○三兵 弓・劍・槍という三つの武器。また、それらを持った兵士。
○干戈 武器。 ○梟鳥 幕府に逆らう敵を梟にたとえたもの。 ○誅戮、罪きびしくして 罪への処罰が厳しいので。 ○虎狼 悪人。 ○一朝 朝廷。 ○東風 ここでは東国にある鎌倉幕府という意味を含む。あとの「東日」(東から差す日光)も同じ。 ○四海 日本全国の全体。 ○朝儀國務 国全体のあり方。 ○万緒の機 複雑な織物。 ○羊質 外見は立派だが中身がないこと。作者が自分自身を指していると考えられる。 ○関山 故郷を遠く離れた土地。ここでは鎌倉を指す。 ○千程 遠い道のり。 ○芳縁 よい機会。

問一 空欄 **A** に入る語として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 21

- ① 底 ② 蓋 ③ 筒 ④ 縁

問二 傍線部①「女冬素雪の嵐は、凌ぐにあたはず」の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 22

- ① 厳しい冬の吹雪は、どうにか切り抜けられなくもない。
② 厳しい冬の吹雪は、ひたすら我慢するにこしたことはない。
③ 厳しい冬の吹雪は、もはや乗り越えられるとは思えない。
④ 厳しい冬の吹雪は、とても耐え忍ぶことができなない。

問三 傍線部②「鏡の影に對ひ居て、知らぬ翁に恥ぢ、鑷子を取りて、白糸にあはれむ」とありますが、この部分には作者のどのような心情が表れていますか。その説明として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 23

- ① 年老いた自分の姿が恥ずかしく、この世から消え去ってしまいたいと願っている。
- ② 自分もずいぶん年を重ねたものだ、これまでの人生を感慨深く振り返っている。
- ③ いつのまにか自分がひどく年老いてしまつていたことに驚き、嘆き悲しんでいる。
- ④ 人とは必ず老いてゆくもので、心身の衰えも仕方のないことだと諦めている。

問四 傍線部③「法衣色染みなば、衣裏の珠は惜る事を得つべし」の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 24

- ① 仏道への思いを深めていったならば、自身の仏性にもきつと気づくことができるだろう。
- ② 仏に仕える道を選んだのだから、自身の仏性にはなんとしてでも気づかなければならない。
- ③ 仏門に入つて衣の色を変えたとしても、自身の仏性にはなかなか気づくことはできないだろう。
- ④ 仏道の修行に日々努めていれば、自身の仏性にもいつかは気づくことができるかもしれない。

問五 傍線部④「そもそも、相模国・鎌倉郡は、下界の龜洗苑、天朝の築塩洲なり」とありますが、この一文から始まる段落で、作者はどのようなことを言っていますか。その説明として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 25

- ① 鎌倉にいた頃に見聞した事柄をもとに、鎌倉という土地と鎌倉幕府を礼讃している。
- ② 伝説の名所になぞらえることで、鎌倉はこの国の中心となるべき場所だと主張している。
- ③ 誇張を多く交えた表現により、鎌倉が人々の畏敬の対象となった経緯を説明している。
- ④ ささまざまな比喻を用いた描写で、鎌倉幕府の持つ強大な武力とその威光を強調している。

問六 傍線部⑤「一朝の春の情は、東風にあふがれて恵をまし、四海の潮の音は、東日に照らされて波を澄ませり」とありますが、これはどのようなことを言っているのですか。その説明として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 26

- ① この国に豊かさや平和を取り戻すためには、鎌倉幕府の力が欠かせないということ。
- ② 朝廷が栄えて国が富み、天下太平であるのは鎌倉幕府のおかげであるということ。
- ③ 鎌倉幕府が余計な波風を立てなければ、この国はもっと栄えていたはずだということ。
- ④ 今よりもっと国を豊かにしたいのであれば、鎌倉幕府に逆らつてはならないということ。

問七 この文章の内容に合致するものを一つ選びなさい。

解答番号 27

- ① 不遇を嘆きつつ世を離れて暮らしていた作者は、話に聞く鎌倉の地の素晴らしさをただあれこれ心に思い描くのみだったが、よい機会にめぐりあつたことから、実際に鎌倉を訪れることを思い立った。
- ② 京の郊外の山の中で修行に明け暮れていた作者は、年老いて思うように体が動かなくなつてしまふ前に、まだ若かった頃に訪れ、その素晴らしさに感銘を受けた鎌倉の地をもう一度訪れることにした。
- ③ 自分が貧しい境遇にあるのは信仰心が薄かつたためだと気づいた作者は、故郷を離れて旅をしながら信仰を深めれば貧しさから抜け出すことができるはずだと考え、旅立ちの好機をうかがっていた。
- ④ 鏡に映つた自分の年老いた姿を見て人生の終わりが近いということを悟つた作者は、長年の望みであつた、京から遠く離れた東国の鎌倉の地で修行をしながら、ひとり静かに人生の最後を迎えようと決心した。

問八 「海道記」は、鎌倉時代に成立した紀行文です。これと同じジャンルの作品として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 28

- ① 「古来風体抄」
- ② 「曾我物語」
- ③ 「奥の細道」
- ④ 「折たく柴の記」